

国際社会において、受容・発信する能力の育成 : その2

著者	秋元 佐恵, 須田 智之, 多尾 奈央子, 橋 深美, 八宮 孝夫, 平原 麻子, 山田 忠弘
雑誌名	筑波大学附属駒場論集
巻	53
ページ	95-118
発行年	2014-03
その他のタイトル	Developing the Ability to Function in the Global Community (2)
URL	http://hdl.handle.net/2241/00123679

国際社会において、受容・発信する能力の育成

－その2－

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

秋元 佐恵・須田 智之・多尾奈央子
高橋 深美・八宮 孝夫・平原 麻子
山田 忠弘

国際社会において、受容・発信する能力の育成

－その２－

筑波大学附属駒場中・高等学校 英語科

秋元 佐恵・須田 智之・多尾奈央子

高橋 深美・八宮 孝夫・平原 麻子

山田 忠弘

要約

今年度は本校 SSH 研究指定校第 3 期の 2 年目である。新規研究開発課題は「豊かな教養と探究心あふれるグローバルサイエンティスト(global scientist)を育成する中高大院連携プログラムの研究開発」となっており、6 つの研究の柱の中には「(iv)国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」が位置付けられている。また、ここ数年で本校生徒が海外で研修をしたり、研究発表を行う機会が増えてきた。今年度は、4 カ国の生徒が集う東芝地球会議（東京）、台中高級第一中学校研究交流（台湾）、釜山国際高校訪問（韓国）等のプログラムが実施されている。この状況を踏まえ、英語科は普段の授業の中でよりいっそうのプレゼン能力向上を意識しつつ、外部からスピーチコーチを招くなどして標記の研究プロジェクトを 5 年計画で進行させている。

キーワード：グローバル・サイエンティスト、英語プレゼンテーション能力、受容、発信

1. はじめに

1.1 英語科の授業構成

本校英語科では中高 6 ヶ年一貫教育の指導課程として、生徒の発達段階に応じ、6 年間で基礎期〔中 1・中 2〕・実践期〔中 3、高 1〕・発展期〔高 2・高 3〕という 3 つの段階に分けて位置づけ、それぞれの特徴に応じた指導にあたっている。

授業構成は以下のとおりである：

中学 1 年生～中学 3 年生

「英語」4 時間（LL・TT 各 1 時間を含む）

高 1 「コミュニケーション英語 I」3 時間＋

「英語表現 I」2 時間（＝TT1＋LL1）

高 2 「英語 II」4 時間（TT 1 時間を含む）

高 3 「リーディング」3 時間（自由選択）

「ライティング」2 時間（自由選択）

今年度より高校英語は学年進行で科目内容が変わるが、本校は従来より「英語は英語で教える」ことやコミュニケーション活動を重視した教育を行っており、新学習指導要領に変わったからといって特に目新しい事を始める予定はないことを付け加えておく。

1.2 英語科の取り組みの指標

本校の学校教育目標は「本校の教育目標である『自由闊達の校風のもと、挑戦し、創造し、貢献する生き方をめざす』の理念にもとづき、生徒自らが学ぶ態度の涵養に努め、将来を担う社会のトップリーダーとして活躍できる能力と意欲を身に付けさせる」である。また、昨年度より新規にスタートした SSH 研究開発課題として「グローバルサイエンティストの育成」が掲げられ、そのための手段として「国際交流や学会発表の場で通用する英語プレゼンテーション能力の育成」が標榜されている。英語科はこれらの課題達成に積極的に貢献する所存である。

本稿では、まず本校の国際交流の機会について述べ、次にこの 1 年間の英語科の取り組みを振り返る。最後に、国際交流に当たって、英語科でどのように支援したかを報告する。

2. 本校の国際交流

2.1 はじめに

本校はスーパーサイエンスハイスクール（SSH）と

して、海外の高校との研究交流実績を積みあげてきた。昨年度からはさらに、国際社会での活躍を前面に押し出した第3期目の研究開発に入ったところである。また23年度より筑波大学はその附属学校に対して「先導的教育拠点」「教師教育拠点」「国際教育拠点」の3拠点構想を実現するよう求めており、この数年で本校生徒が国際的に活躍する機会が確実に増えてきた。

2013年度の国際交流活動事例を以下にあげる
＜SSH 関係＞

- a. 台湾台中高級第一中学との相互訪問（授業参加、英語による研究発表交流）
 - b. 釜山国際高校との相互訪問
- ＜SSH 以外のもの＞
- c. 東芝地球未来会議（東京にて4カ国の生徒が環境問題について英語で討論）
 - d. EU 代表部による本校での勉強会
 - e. ジャパン・リターン・プログラム(JRP)による外交官との交流会
 - f. ノーベル賞受賞者との HOPE ダイアログ参加
 - g. 日本学術振興会によるサイエンスダイアログへの参加
 - h. 筑波大学教員研修留学生との交流
 - i. イングリッシュ・ルーム

昨年度に比べると、コア SSH 校との提携による海外交流が減ったものの、これまでこちらからの訪問のみであった台中一中との交流が相互訪問の形となり、また昨年からは釜山国際高校との交流も定着してきた。また、i. の「イングリッシュ・ルーム」は国際交流とはやや性格を異にするが、これらについて詳しくは別の項で述べる。

このように多彩な機会を通じて生まれる生徒の気持ちを大切にしながら、英語学習にさらに意欲的に取り組んでくれることを願いつつ、日々の授業を展開している。

3. 各学年における取り組み

3.1 中学1年生（67期） 担当：秋元佐恵

3.1.1 はじめに（基礎期のスタート）

中学1年では、「英語と友達になろう」を目標に、「Hello, English!」という自作プリントを用いて指導を行っている。小学校5・6年で全員が英語に触れているとはいえ、出身小学校によって学習程度にかなりの差があることが初回のアンケート（補足資料1）で

判明した。しかし同時に見えてきたのは、英語に対する好奇心や高い目標設定である。「将来海外の人と英語で意見を交換したい」「英語で論文を読みたい」など、高校以降の夢を語る生徒が予想以上に多くいた。これは大事にしたいと思った。そこでまず、中学英語は小学校英語とは違うことを伝え、将来にわたって英語という言語と良き友達になるためには、「声に出す・復習する・毎日やる」の3つが大事と呼びかけた。中1の入門期は、言語を楽しく学ぶだけでなく、学ぶ姿勢や「型」を身につける時期でもあると筆者は考える。今年度は以下の3つを指導目標とした。

- ① 音声とスペリングの結びつきを学ぶ
- ② 聞こえた単語や文を正しくきれいに書く
- ③ 文章の型を身につけ、自己表現につなげる

以下の文章では、この3つについて実際に効果のあった指導例を述べる。

なお、授業は週4時間で、2時間がハンドアウトと教科書 *New Crown English series 1*（三省堂）をもとにした授業、1時間が AET とのティーム・ティーチング、1時間が *Listen first* (Oxford) を用いた LL の授業となっている。

3.1.2 授業での取り組み例

3.1.2.1 音声とスペリング【発音ルールの徹底】

初回のアンケート結果によると、小学校で文字学習を終えた生徒は、各クラスとも約半数にとどまった。そこでまず、各アルファベットの発音に時間をかけ、その後、フォニックスおよび手島(2004)などを参考に、筆者が「発音ルール」を作って、順次教えることにした。最初は小テストで出てきた単語の復習として始めたのだが、生徒の反応が良かったので、続けてやるようになった。この中学初期の生徒たちの、新しい音（とくに日本語にはない音）に対する好奇心は旺盛で、みな喜んで発音する。例として1学期中に学んだ発音ルール10までを示す。

- (1) air: hair, pair, fair
- (2) ea: teach, eat, read
- (3) silent 'e': take, make, snake
- (4) th: the, thirty, math
- (5) ir: bird, girl, first
- (6) all: tall, wall, small
- (7) 子音連続: swimming, running
- (8) au / aw: autumn, Paul, law, hawk,
- (9) ay / ai: May, play, rain, mail
- (10) ow: how, town, owl

この指導の効果として、生徒の多くは文字と音との結びつきにかなり興味を持つようになり、その後のスペリングの定着率も高いようである。なお、3 学期には発音記号を終える予定であるが、まずは正しい音の出し方（口の開き具合・舌の位置など）を覚えてほしいと思っている。

3.1.2.2 聴いて正しく楽しく書く：単語でビンゴ

単語を正しく聞いて書く訓練として、主に TT の授業で「単語ビンゴ」というものを行っている。これは数字でよくやるビンゴと同じ原理で、一つ一つの升目をとても大きくして単語を書かせるものだ。アルファベットや数字ビンゴをやった後に、思いつきでやってみた。やり方は以下の通り。

(1)ある単語カテゴリーを教師側が決めて、AET に 20 個読んでもらう（たとえば、「動詞」「進行形」「形容詞」「人称代名詞」など、学習したばかりのもの）。読んだ単語を日本人教師が板書していく。

(2)生徒は 4×4 の升目に、読まれた単語から 16 個、好きなものを選んで埋めていく。一緒に発音させるとなおよい。

(3)AET がその単語を使った文を 1 つずつ読んでいき、生徒は聞こえたらその語を×で消していく。2 列揃ったらビンゴ。教師に見せてシールをもらう。

run	walk	swim	speak
eat	get	do	fly
give	go	write	sleep
make	read	take	wash

このゲームでは、聞き取りと書き取りが同時にでき、単語のカテゴリー化とともに、その単語がどんな文脈で使われるか、自然に学ぶことができる。生徒全員が楽しめるゲームだ。

このほか、高校生を教えていた長年の習慣で、前の時間に学んだ文のディクテーションを、復習として毎回行っている。

3.1.2.3 文章の型を身につける【好きなページ暗誦】

サイドリーダーで読んだものの中から、好きなページを選び、みんなの前で暗誦させている。文法や語彙は未習のことが多いが、あまり気にせずに選ばせる。モデル音声はあらかじめ配布してあるので、それを聞いて各自が家で練習してくる。TT の時間に、そのページの写真を持って前に出て暗誦するのである。生徒たちの取り組みは非常によく、全員が大きな声で立派

な暗誦をした。

たとえば夏休みに読んだ *Let's go to the rainforest* (Oxford) の中には、以下のようなページがある。

Let's go to the rainforest.

First, you fly in an airplane.

Then you ride in a truck.

Then you go in a boat.

Finally you walk.

このページを暗誦した生徒は、のちにある紹介をする際、first, then, finally など上手に使って発表してくれた。筆者はこれまで常に「オーセンティックで質の良いインプット→インテイク→アウトプット」という流れを意識した授業を行ってきたが、やはり中 1 でもこれは有効な方法だと思った。今後も説明文や物語など、色々な種類の良い文章の暗誦を授業で取り入れていきたい。

3.1.3 今後の課題

2 学期までの段階で、生徒たちはある程度、英語を毎日聴いて書き、英語と「仲良く」してくれているように思う。また、短文ではあるが、自己表現を楽しんでできるようになってきている。今後はインプットしたものを高度な自己表現につなげていけるよう、さらなる教材の工夫をしてゆきたい。

3.2 中学 2 年生 (66 期) 担当：須田智之

3.2.1 はじめに

中学 2 年生では「Communication Skill としての英語運用力を高めていく」、「英語を使って感動・意見を共有していく」、「英語の発想（日本語との違い）により慣れていく」という 3 つの目標を年度当初に掲げ、授業を展開している。英語への興味関心が高い生徒や自主的な学習に取り組む生徒も多いが、塾などでの学習にも熱心に取り組んでいる生徒が多数いる一方で、学校の授業以外に英語に触れる機会がほとんどない生徒も一定数おり、生徒の習熟度の多様性への配慮が大きな課題となってきた。このような現状の中で、本校の英語授業での最終目標は「コミュニケーションの手段としての英語を身につけさせること」・「知識に留まらない英語運用力を養うこと」であると考え、実際の授業を組み立てている。

3.2.2 授業での取り組み

英語の週配当時間 4 時間は 3 つの要素から構成さ

れる。「教科書を中心に英語の基本的な仕組みを学ぶ時間」2時間、「LL 教室で聴解能力の訓練をする時間」1時間、「ALT とともに実際に英語を使ってみる時間」1時間という組み立てである。

以下に授業の概要を述べる。

(1)教科書中心の授業（週2時間）

New Crown English Series 2（三省堂）を使用し、英語による意味伝達を大切に授業を心掛けている。教科書の題材の使用に強弱をつけ、発展的な内容や教科書以外の教材の活用も必要だと判断し、2学期末にはNHK ラジオ講座『基礎英語 3』の巻末の読み物 *The Dancing Men* を使用した。また、昨年度から継続して音声面強化と *Warming-up*、更には文法事項の導入を兼ねて英語の歌を紹介している。1学期には映画「アルマゲドン」の主題歌 *I don't want to miss a thing*, Queen の *I was born to love you* や *We will rock you*, *Bicycle Race*, 2学期には *Journey* の *Don't stop believin'*, *Open Arms*, U2 の *Where the streets have no name* などを取り上げた。

(2)LL 教室での授業（週1時間）

LL 用コースブック *Basic Tactics for Listening* (Oxford 大学出版) をコースブックとして使用し、リスニング力の強化に努めている。昨年度に引き続きベテランの講師の先生におまかせしており、例年どおりの指導をいただいている。

(3)ティームティーチングの授業（週1時間）

ALT と共に行う授業で、教科書ではカバーできない日常的な単語を多く取り上げて語彙力増強を図りつつ、既習の文法事項を定着させるために意味のある言語活動を行い、実際に使える英語力の育成を目指している。夏休みを境に New Zealand 出身の ALT が帰国するため本校を去ることになり、後任の ALT が実際に授業を受け持つようになるまでの一か月間に、週替わりで複数のネイティブ講師に来校してもらうなど、苦慮した点もあった。

3.2.3 その他、授業外での取り組み

(1)English Journal

今年度から生徒に自由英作文用のノートを一冊持たせ、時折テーマを与えながらある程度まとまった分量の英文を書く指導を開始している。これまでのトピックは自己紹介、GW の思い出、夏休み日記、高校生になったら、将来の夢、冬休みの思い出などである。

(2)パフォーマンス・テスト

学期ごとのパフォーマンス・テストとして、スピー

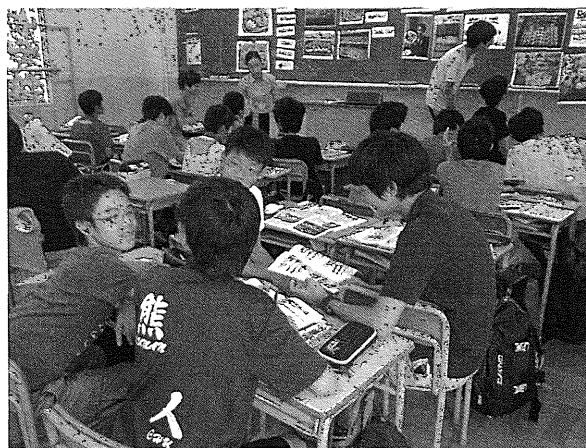
チを行っている。1学期には本校の総合学習で行う東京地域研究（興味・関心のあるテーマについて企業や公官庁などの訪問調査とプレゼンテーション発表や報告書の作成を行う）について、Tokyo City Field Studies と題して英語でも簡単なプレゼンテーションを実施した。また、2日間にわたる東京地域研究の発表会の最後にも4つの班が英語でのプレゼンを披露し、今年度実施している English Room の講師陣にコメントとアドバイスを頂いた。2学期には Show & Tell を実施、新しいアメリカ出身の ALT に生徒達を知ってもらう良い機会になった。

(2)副教材など

英語力を定着させるためには週4時間の英語の授業（＝総計200分）だけでは足りないのは明らかである。生徒にはNHK ラジオ講座『基礎英語 2』または『基礎英語 3』などの聴取を奨めている他、文法学習用の自習用教材としては『マーフィーのケンブリッジ英文法（初級編）新訂版』（Cambridge University Press）を使用している。また、長期休暇の読み物には音源の付属しているものを選ぶなどの工夫もしている。

(3)多読

中1時に実験的に導入していた多読までは、残念ながら現在継続的な指導ができていないが、長期休暇の課題として夏休みには *Wonders of the Past* (Oxford Read & Discover, Level 4)、冬休みには *Apollo 13* (Penguin Readers, Level 2) を課題とした。



教育実習生を迎えて

3.2.4 今後の課題

「国際社会で発信する能力の育成」をめざし、授業と生徒の自主的な学習の相互作用をいかに深めていくか、冒頭に述べた生徒の多様性に配慮しつつ英語への興味・関心をいかにして引き出していくかが今後の課

題である。

3.3 中学3年生(65期) 担当: 八宮孝夫

3.3.1 はじめに(実践期のスタート)

中学3年は6年間のシラバスの中で「実践期1年目」として過去2年間で得た基礎知識を少しずつ統合させ、コミュニケーション(必ずしもオーラルコミュニケーションに限定せず)の手段として使っていけるよう、スキルを高めることに重点を置いている。

本学年では筆者がJTE単独の授業(2単位)+LL授業(1単位)+TT授業(1単位)全てを担当している。教材は、単独授業では三省堂の*New Crown English Series 3*(昨年度改訂版、以下*Crown 3*)を基本に各課の題材について少し発展的な読み物に加え、LLでは年度当初は引き続き、*Basic Tactics for Listening Third Edition*(Oxford)を基本的には使用し、各学期の後半には、ビデオ教材など用いて自然な英語を聴かせるようにしている。なお、筆者の場合、基本的に英語によるOral Introductionで教材を導入し、インタラクションを通じて内容理解させ、音読、まとめというスタイルをとっている。

3.3.2 具体的な取り組み

語学の学習の場合、外国語であってもそれが読みたくなるような「内容的に魅力のある教材」が非常に重要な要素だと思う。中学3年ともなると、一通りの文法事項が出て、語彙もそれなりに増え、知的好奇心に訴えるような教材がますます必要になってくる。教科書の内容にみな魅力がないとはいわないが、これまで読んで筆者が感銘を受けたり、本校で教えてきて経験的に生徒が興味を持ちそうな教材がある場合には、そちらを優先してしまう所以である。もちろん、筆者の好みであまり内容が偏ってはいけないので、各学期少なくとも3分野(文学的なもの、科学的なもの、社会的なもの)にわたる教材を扱うよう心がけている。

3.3.2.1 1学期の実践

(1) 2時間の通常授業

1学期に扱った教材は以下のとおりである:

- 1 My Favorite Words (*Crown 3*, L.1)
- 2 Lafcadio Hearn
- 3 Yuki-Onna 《文学》
- 4 Learning from Nature (*Crown 3*, Let's Read) 《科学》
- 5 The Story of Sadako (*Crown 3*, L.4) 《社会》

1は教科書の最初の課で、どの生徒にも favorite words をたずねてみたり発表活動に結びつけたりできる可能性があったので採用した。本文ではある肉体的ハンデを持った野球選手 Pete Gray の言葉 “A winner never quits” が引き合いに出されていた。You-tube に Gray の映像もあったので、それを活用し、どんな人物かもリスニングさせ、個々の生徒の favorite words を書かせ、その理由や、それにまつわるエピソードを英語で書かせ、発表させた。結構いろいろな表現が出て、proverbs のいい勉強になった。以下はその例:

発言者の人柄が出ているもの

・ Common sense is the collection of all prejudices acquired by age 18. (Einstein)

・ Life is a tragedy when seen in a close-up, but a comedy in a long-shot. (Chaplin)

最近流行ったもの

・ When will you do? NOW!

(いつやるの? 今でしょ)

2は中2の3学期に“Mujina”を扱った関連で、取り上げた。中2で扱った John Manjiro もそうであるが、Hearn も異文化体験をした人物であるので cross-cultural communication の視点からも、またその作品が今でも日本人になじみがあるという点でも重要である。生い立ち程度であまり深くは扱えなかったが、その代わり“Mujina”よりかなり長い作品である 3 “Yuki-Onna”を関連して扱った。少し古めかしい英語であるが、付属 CD の朗読もよく、お勧めである(『小泉八雲の『怪談』で英語を学ぶ』国際語学社)。ややわかりにくいところに注釈を付け、内容に関する質問を付したハンドアウトを配布し、ゴールデンウィーク中の課題とした。連休後、CD で音声を確認しながら Q&A により理解をチェックした。

4は「三浦折り」などを含む自然の中に存在する便利な仕組みを生活に活かす、という課で科学関連として、また5は原爆の犠牲者となった少女の話で社会的というか平和教育教材として扱ったが、いずれもあまり深く扱うことなく、総花的になってしまった点が反省点である。

(2) LL の授業

Basic Tactics for Listening (3rd ed) の中2の続き (Unit 14 Small Talk) から扱った。学期の後半で、Unit 17 Hopes and Plans で <I wish + 過去形の文> の仮定(願望)表現が出てきた。そこでそれに習熟させようと、仮定(願望)表現の頻出する *The Wizard of Oz* のビデオ

を LL 残りの時間に視聴させた。主人公ドロシーが会う 3 人の仲間がそれぞれ、自分がないものを願望する歌を歌うのである (例えばかかし(Scarecrow)であれば, "I would dance and be merry ... if I only had a brain")。これらの表現を用いて、TT の時間に「もしタイムマシンがあったら、どの時代に行きたいか、その理由、そこで何をしたいか」を考えさせ、発表させた。

(3) TT の授業

基本的にはなるべく発表活動に使いたいのので、1 学期の前半は上述したように My favorite words を 3 回に分けて発表させた。ただ発表するのではなく、ちゃんと聞き手にわかるように favorite words を大きな紙で用意させ、示しながら発表させた。後半では、LL で扱った *The Wizard of Oz* の内容確認を行い、また "If I had a time machine" の発表活動 (パフォーマンス・テスト) を行った。一例あげる:

If I had a time machine, I would go back to Korakuen Stadium of the 1970s. You know why? Because I have been a big fan of the Giants and they won the pennant race of Central League and the Japan series every year from 1965 to 1973. So I would see the members of the Giants of that time. Especially, I would see Shigeo Nagashima playing baseball actively. If I had a chance to meet him, I would handshake with him. And Korakuen Stadium was taken down in 1987, so I've never seen it. So I would see the stadium. That's why I would like to go back to Korakuen Stadium of the 1970s. Thank you. (3-B, F)



"If I had a time machine, I would..."

中 3 で仮定法?と思われるかもしれないが、昨年の論集でも述べた通り、難しいとされる項目だからこそ、早めに出して、出てくるたびに塗り直すスパイラル方式の学習が生きてくるのである。

3.3.2.2 2 学期の実践

(1) 通常授業

1 学期には、題材をあまり深く扱えなかったのを反省して、2 学期はやや話題を絞って深く学習させるよう心がけた。扱った教材は以下のとおりである:

6 I Have A Dream (*Crown 3*, L.6) 《社会》

7 The Black Cat 《文学》

8 Gregor Mendel – the Father of Genetics 《科学》

6 は有名なキング牧師の公民権運動についての話であるが、アメリカ史や黒人の歴史などの背景知識がないと、実感を伴って理解させるのは難しい題材である。殊に、前述したように改訂版の *Crown 3* では、はじめの 2 セクションの内容が薄く、背景知識はほとんど提示されないまま Read としてローザ・パークスのバス事件に入っていくのである。筆者が担当している生徒は、中 2 の歴史の授業で、『アメリカの小学生が学ぶ歴史教科書』(ジャパン・ブック) を使用しながら、班ごとに担当の時代を前で説明発表するという授業を経験していた。それによって大まかであるがアメリカ史についての知識があり、特にリンカンの奴隷解放宣言あたりでは黒人差別についても相当学習していた。そこで、中 3 の夏休み課題として、*Martin Luther King* (Penguin Readers, Level 3) を読ませた。この本は、黒人の歴史とキングの生い立ち、その後の公民権運動への展開が非常に良くまとまっており、アメリカ史の概要の知識がある生徒にとっては、それを英語で確認するという形で有用である。

2 学期には黒人の歴史、キングの生い立ちを中心に付属 CD でリスニングをしながら理解を確認した。その上でローザ・パークス事件やワシントン大行進の様子を扱い、"I have a dream" スピーチの一部を練習、暗唱させた。2013 年は、ワシントン大行進 50 周年にあたっており、8 月下旬にオバマ大統領の記念スピーチもあったので you-tube で音声を取っておき、その一部も学習し暗唱させた。これは、キングのスピーチにも出て来る「独立宣言」の "We hold these truths to be self-evident ..." で始まる有名な文で、「日本国憲法」にもその精神は生かされている。従来、筆者は高校 1 年でこの部分の暗唱をさせていたが、今回中 3 で実践してみて、十分可能であるとわかった。名文は、それを暗唱しようという気を起こさせる力を持っていると感じた。なお、総合的なまとめとして、『攻略! 英語リスニング』2013 年 8 月号 (NHK 出版) にあった「キング牧師」をリスニングさせた。

7 の The Black Cat は *The Black Cat and Other*

Stories (Penguin Readers Level 3)に所収のもので、筆者はこれまで2度使用し、いずれの期でも生徒に人気の高かった作品である。酒に溺れて精神状態がおかしくなっていく様子をポー特有の描写で語っており、リトールドとはいえ、生徒の読解力を喚起させる教材である。Oral introductionでは概要のみ与え、リスニングポイントを示してCDを聞かせ、理解を確認しながら進めた。The Black Catはいくつかの社のsupplementary readersに入っているが、朗読としてはPenguinのものが優れている。この種の物語では、描写に頻出する<with + 名詞 + 形容詞・分詞>の付帯状況表現に習熟する必要がある。この表現が使えるようになると、「口にくわえて」「肩に担いで」「小脇に抱えて」のようなこねた日本語が平易な英語で書けるようになるので、ぜひ習熟させたい。なお、ポーの作品をもう1つ読んだが、それはTTの項で述べる。

8はエンドウ豆の遺伝の研究で著名なメンデルの話である。以前担当した期でも使用したが、その時は理科で遺伝の学習が未習のうちに扱って後悔した。今回は理科でまさに遺伝の授業が始まったばかりだったので、それを後追いするように英語でも扱った。未習のものを英語でoral introductionするのは徒労であり不可能に近い。逆に既習のものであれば、その知識の上に英語の表現を貼っていけばいいので、例えばAaBbの掛け合のような表を作ればdominant gene=「優性遺伝子」ということが了解される。一方、英語では理科で扱わないようなメンデルの生い立ちなどを扱うため、教科間の相互補完をすることもできるので便利である。なお、この教材は基本的には自作なのであるが、以前と比べ、インターネット上の画像やサイトが格段に充実しているのに驚かされた。特にNational Human Genome Research Instituteのサイトは遺伝子の研究に貢献した科学者が時系列に平易な英語で簡潔に説明しており、専門家による映像解説もついているものもある。今回は、それを音声教材の補助として使用した。

(2) LLの授業

1学期の続きを10月末までは扱い、11月の3回をDVD視聴に当てた。今回はポーのミステリを読んだこともあり、ミステリつながりで、A. クリスティの*Murder on the Orient Express*を視聴した。この作品は、様々な外国人の訛りのある英語を聞くことができ、もちろんミステリなので謎解きの要素もある。登場人物が多いので、初回に登場人物の写真と名前、車両の見取り図などを配布した。また、英語の質問も添えた。

さらに、*Murder on the Orient Express* (Penguin Readers Level 4)の話の核になる部分のページを配布し、音だけでなく文字による理解・確認も課した。期末考査では話の結末について、賛成か反対か、その理由も含めて書く問題を出した(→補足資料2 設問10)。ただ、漫然と視聴させない工夫が必要である。

(3) TTの授業

2学期はALTが新しい人と入れ替わり、若い米国人になった。詩の朗読が好きというだけあり、物語を朗読してもらおうとデリバリーが素晴らしかったので、音読練習を取り入れることにした。また、上述のThe Black Catの別バージョンで挿絵が細かく付いているもの(『ポー短編集』開隆堂出版)があったので、その挿絵を利用して、ALTに対してそれまで学習した話を英語で説明するという活動をした。特に特定の生徒に当ててさせたわけではないが、ALTに呼び水となる質問をしてもらいながら、クラスで口々にそれぞれの絵について英語を発するようにさせた。ただ、これだけだと漠然とした活動になってしまうので、期末考査には絵を説明させる問題を出す予告しておき、全員が英語で考えるよう促した。その設問と解答例を挙げておく(→補足資料2 設問7)。

The Black Catの読了後、もう1篇ポーの作品を読ませたいと思い、文化祭後の代休を利用し、The Fall of the House of Usher (*Tales of Mystery and Imagination*, Oxford Bookworms, Level 3に所収)と注釈と英語の設問を付したハンドアウトを事前に配布した。TTの授業では場面ごとにCDをかけリスニングで理解を促しながら、ハンドアウトの設問チェックをしながら進めた。こちらの話も有名であるが、心理面の展開はあるものの、具体的な動きに欠けるので、読み物としては最適とは言えないかもしれない。なお、反省点としては、TTの時間なのに、通常授業の延長のような展開にしてしまったことである。3学期は、発表活動に重点を置きたい。

3.3.2.3 3学期の授業(予定)

3学期は短いが、以下を扱う予定である：

- | | |
|--------------------|------|
| 9 Romeo and Juliet | 《文学》 |
| 10 I am Malala | 《社会》 |
| 11 Galileo Galilei | 《科学》 |

9は冬休み課題である。以前の期でも扱った題材であるが、もっと平易な読み物を使用した。今回はMacMillan Readers Level 4でかなりchallengingであるが、DVDも活用して扱ってみたい。

10 は、夏の自由課題として生徒 2 名が提出したもので、パキスタンの 16 歳の少女マララの国連でのスピーチである。You-tube にあり、17 分の長いものであるが、2 学期のキング牧師にも通じるもので、しかもほぼ中 3 生と同年齢であり、内容も良いので扱うことにした。

11 のガリレオは近代科学の祖であり、偶然にもシェイクスピアと同じ年に生まれ、2014 年は生誕 450 年にあたる。キングの課でも使用した Galileo Galilei (『攻略! 英語リスニング』2013 年 11 月号)を活用する予定である。

3.3.3 今後の課題

実践期として、様々な分野の語彙や表現を増やそうと、これまで筆者が担当してきた期よりも supplementary readings を多めにしてみたが、一方でアウトプットでは不十分な面が見られた。昨年の中 3 では、賛成・反対・意見を述べるなどの活動をかなり試みたようであるが、筆者の実践では、その点で不十分と言わざるを得ない。今後は、それを如何にアウトプットに持っていくかに留意して実践を続けていきたい。

3.4 高校 1 年生 (64 期) 英語 I 担当: 高橋深美

3.4.1 はじめに

本年度から高校 1 年生が新指導要領に移行し、従前の英語 I がコミュニケーション英語 I に再編され、教科書類も一新された。

本校で使用している教科書は *UNICORN English Communication 1* (文英堂) である。

この教科書は 10 課からなり、それぞれの課が、4 つのセクション、文法解説、Exercises、Supplementary Reading から成り、他に 1 課おきに UNICORN TRAVEL というコーナーが数ページあるが、授業で扱うのは主として本文と Supplementary Reading とし、ほかに副読本を使用したり、教科書の内容に関連した独自教材を作成し使用したりしている。文法は必要に応じて説明するにとどめており、語彙、文法の補強として、付属のワークブックを持たせ、各自で取り組むこととしている。

3.4.2 授業での取り組み

1 学期は次の 4 課を学習した。

1. This Is Me
2. Dewey the Library Cat

3. A World of Colors

4. Forests for the Future

1 課終えるごとに 1~2 回発展教材を付け加えたが、基本的にあまり時間をかけず、残余の時間で、*BEOWULF* (Black Cat 版) を、ベオウルフがグレンデルとその母親を退治して故郷に凱旋するところまで読み進めた。

2 学期は次の 4 課を学習した。

5. A Dive into the Ocean

6. El Sistema: The Miracle of Music

7. Why Are You Sleepy?

8. Haruki Murakami Abroad

2 学期の発展教材については以下の通りである。

5 課は作者の Sylvia Earle が約 4 年前に行った TED スピーチがあり、映像も美しくまた衝撃的だったので、教材化して映像を見ながら授業をした。18 分のスピーチだが、全体の 80%位を使い、4 時間分の教材とした。

6 課は南米のベネズエラで国家規模の音楽教育プログラムに成長した「エル・システマ」の話であるが、関係者の語りと団員の家庭、音楽シーンから成る DVD があり、中で語られている、創始者の Jose Antonio Abreu の哲学が大変すばらしく、また、さまざまな音楽シーンが生徒のイメージを広げる上で役に立ちそうだったので、編集して教材化した。ベネズエラが舞台であるから、話している言葉はスペイン語だが、その英語字幕を教材にした。

7 課については insomnia と narcolepsy である。

8 課はカナダの大学の先生が語る村上春樹賛歌で、作品を読んだことがないとピンとこない課である。教科書の扱いは簡単にして、別に 2009 年にイスラエルで文学賞を受賞した際に村上春樹が行ったスピーチを並行して使用した。

また、本年 5 月 6 日に村上春樹が 18 年ぶりに公に語るイベントがあり、ニュースになっていたので、予め録画しておいた。この時の録画と副音声 (英語) を教材として授業で活用した。

3.4.3 スピーチについて

本年度の Communication English I では、各学期に 1 回全員がスピーチをすることとしている。

1 学期は「*Beowulf* を読んだ感想」「*Beowulf* の話の要約」「*Beowulf* の文学的価値」のどれかを選択して、1 分~1 分 10 秒程度のスピーチすることとした。この活動はリーディングをスピーキングにつなげる活

動としては有意義なものであった。筆者は当初「話の要約」をする生徒が多くなるだろうと予測したが、1分で要約することは逆に難しいようで、感想と要約がおよそ4割ずつ、文学的価値を話したものが約2割であった。

スピーチのデリバリーに関しては、高入生には中学校であまりスピーチの体験をしたことがない生徒もあり、それらの生徒には「間違えないようにやろう」という意識が強く出ている者が多かった。

2学期は「授業で学習したことと関係のあること」であれば基本的にトピックは自由として行った。生徒同士の人間関係の深化とともに1学期のよりアイコンタクトもできるようになり、原稿を読むのではなく「語る」ことができる生徒も多くなった。

3.4.4 今後の課題

4技能の伸長が英語科の科目の目指すところであるが、これまであまり「書く」作業をしてこなかったのが、他の技能と関連づけてできるだけ取り入れていきたいと考えている。

3.5 高校1年生(64期)英語表現I担当: 平原麻子

3.5.1 はじめに

今年度より新科目「英語表現I」(2単位)が始まったが、授業の構成については今までと大きな変更点はない。週に1時間ずつLLの時間とTT(ティームティーチング)の時間を設け、LLで発音や聞き取りの基礎訓練を行い、TTでは様々なトピックで積極的に発話・発表することを目指している。前年度までと比べ、TTの授業ではクリティカルシンキングを重視し論理的な発表ができること、および短時間で論理的な文章が書けること、をより意識している

以下、それぞれの内容について記述する。

3.5.2 LLでの授業

3.5.2.1 授業の概要

LLでは昨年度に引き続き、基礎訓練として1単位時間(50分)の中で、シャドーイング・まとまった内容の聞き取り練習・ディクテーションの3本柱を中心に授業を行っている。

3.5.2.2 教材

シャドーイング用教材としては、鳥飼(2003)や玉井(2005)を参考にした他、ケネディ大統領就任演説な

どの有名なスピーチを利用している。

内容把握には、楽しみながら生の英語に触れさせ積極的な使用につなげるために、映画やBBC制作のドラマを利用している。1学期には、イギリスでプロサッカー選手になることを夢見る南米出身の少年の物語*Goal!*(BBC制作)を視聴、2学期には*Kung Fu Panda*、3学期には*The Great Dictator*を扱う。このうち、2学期と3学期の映画は5.4で述べる実技課題につなげている。その他*English Journal*(アルク)採録のインタビューやMystery Speaker等を利用し、生徒は興味を持って取り組んでいる。

ディクテーションではまず、深澤他(1999)等を参考に日本人生徒にとってトラブルスポットとなりやすい音声変化(音の連結、hの脱落等)に慣れさせ、その後、前述の諸教材の中から部分的な書き取りをさせ、さらにシャドーイングやペア練習につなげている。

3.5.3 TTの授業

3.5.3.1 授業の概要

今年度は1学期にニュージーランド出身の男性ALT(50代)、2学期からはアメリカ出身の男性ALT(30代)と共にTTを行っている。ALTの交代はご本人の自己都合だったが、新ALTの赴任までに1カ月かかり、その間色々なALTに週替わりで来ていただいた。生徒にとっては図らずも、英語のヴァリエーションに触れる機会となった。

基本的な授業構成は、授業の冒頭でウォーミングアップとディクテーションを兼ねて英語の歌を聴き、歌ったあと、その日のテーマに沿った色々な表現を練習し、ペアワークやグループワークを経て最後に全体の前で練習の成果を披露する、というものである。2学期からは、クリティカルシンキングを前面に打ち出したテキスト、*Q:Skills for Success*(Oxford University Press)の1Aレベルを導入している。

英語の歌は、オールデイズ("Everyday"など)、ミュージカル"Les Miserables"、The Beatlesなどを利用している。筆者の年齢がわざわざして、なかなかイマドキの楽曲を取り上げられないが、新ALTの特技がラップソングを書くこと、とのことで、3学期は生徒にラップを書かせる試みも入れる予定。

3.5.3.2 学期毎の授業展開

(1) 1学期

1学期の前半は、身近なことについて英語で説明できるようにすることを目標とした。具体的には、「友だ

ちの紹介」「自分が将来やりたいこと」「学校紹介」などである。

後半はディベートの基礎訓練に取り組んだ。まず最初に、日本人が苦手とする「反論」の練習をALT相手やペア同士で充分に行った。その後、ディベート形式に慣れるために、ピンポンディベートやテーブルディベートを行っている。これらの練習方法については、特に松本他（2009）や中嶋（1997）を参考にした。ディベートのトピックとしては、「共学がよいか別学がよいか」「制服がよいか私服がよいか」「Sony PSP がよいか Nintendo DS がよいか」など、生徒に身近で意見が出やすいものを選んでいく。本格的なディベートへの取り組み時期は高校2年生を考えている。

(2) 2 学期

2 学期は新しい教材として *Q:Skills for Success* を選定し、【1】新しいトピックの導入→【2】必要な語彙の練習→【3】関連事項についての速読→【4】トピックに関わるライティング→【5】発表、という流れをベースにした授業を展開している。この他、ちょうど2020 年の東京招致が決まったオリンピックをネタにクイズショーをしたり、夏休みの出来事の報告なども行った。

次に Q の第 1 章：How did you get your name? を使った授業の流れを紹介する。

[1 時間目] ミドルネームをつける

- 1) ALT の名前の由来を聴き、日本にはないミドルネームという習慣について考える。
- 2) テキストを使って語彙練習のあと、中国・スペイン・アフリカ系アメリカ人の名前の付け方に関する教材を速読し、内容理解の確認をする。
- 3) 自分にミドルネームをつけるとすればどんな名前がよいかを考え、ペアで話しあう。
- 4) 自分の選んだ名前とその理由を発表する。

[2 時間目] 良いブランド名の条件について考える

- 1) “Beautiful Name”(ゴダイゴ)を歌う。
- 2) テキストを使って語彙練習のあと、スマートフォン BlackBerry のネーミングに関する教材を速読し、ブランド名に求められる要素は何かについて理解を深める。
- 3) 4 人ずつのグループに分かれて電化製品・即席麺等のジャンルを決め、その中でもっとも良いと思う名前は何か、理由を 2 つ以上あげてまとめる。
- 4) 話し合いの結果を発表。

[3 時間目] ネーミング・コンペ

- 1) “Beautiful Name”(ゴダイゴ)を歌う。
- 2) 本校で毎年中 1 と高 1 が栽培している米を「ブランド米として売り出す」と仮定し、どんな名前にすればよいか、4 人ずつのグループに分かれて話し合う。
- 3) 各グループにホワイトボード (50cmx80cm) を与え、名前と理由を書かせる。
- 4) 全てのグループがホワイトボードを示しながらプレゼンを行い、最優秀の名前を ALT が選ぶ。
大変熱のこもったコンペとなり、生徒も教員もおおいに楽しんだ。

3.5.4 英語表現 I の評価

毎学期の期末考査では、LL と TT で学習したことの定着度を確認するためにペーパーテストを実施している他、授業中に書かせたエッセイ (100 語程度) も評価の対象にしている。これに加えて実技テストを必ず行い、評価の重要な柱としている。課題の詳細は以下のとおりである。

[1 学期]

- 1) 30 秒程度のシャドーイングテスト (100 wpm)
- 2) 「将来起業するなら」(If I Were to Be an Entrepreneur)というトピックで 2 分程度のスピーチ

[2 学期]

- 1) Skit Show : 5 人グループを作り、映画 *Kung Fu Panda* の中からの名台詞を幾つか引用し、10 分程度のオリジナルスキットを書いて演じる。(名台詞の例 To make something special, you just have to believe it's special. / A real warrior never quits. / Yesterday is history, tomorrow is a mystery, but today is a gift. That is why it is the present.)

[3 学期]

- 1) 映画 *The Great Dictator* ラストの Dictator Speech から一部を暗唱
- 2) ペアで 2 分程度の「有名人なりきりダイアログ」を創作し、実演する。
スピーチとスキットに関しては、聴衆用の audience sheet を配布し、生徒相互が楽しみながら評価しあうことも課題としている。ALT からのコメントも含め、すべての評価は本人たちにフィードバックしている。

3.6 高校2年生 (63 期) 英語Ⅱ 担当：多尾奈央子

3.6.1 はじめに (発展期のスタート)

高 2 の学習では、高 1 までに得た知識を場に応じて実践力として使用できる力を着ける学習の「実践期」

からさらに「発展期」として、いかなる channel での input/output であろうと、場面や状況に応じた語彙・表現等を適切に選択肢運用できるよう能力の醸成をねらい、input における場面設定を現実味の高いものにして各言語材料を自分のことと捉えられることに重点を置いている。

本学年では筆者が JTE 単独の授業の英語Ⅱ(3単位)を担当し、別の教員が TT 授業の1単位を担当している。

「読み」「書き」においては単にまとまりのある文章を速く正確に読んだり、書いたりすることができることに終始せず、行間や使用される(する)語句が状況に応じて選ばれている(選ぶ)ことをきちんと理解して言葉を映像として思い浮かべられること、また各単元で学習するそれぞれの文法事項については種々の演習問題が解けるまでの単なる知識として終わらせず、「知っていることを必要な時と場合に運用することができる」力をつけるための学習を授業内外で行うことがいかに大切かを理解させ、それを口頭・筆記の双方で実践させる機会を多く設けることを指導の重要目標としている。

3.6.2 教材と授業での取り組み

英語Ⅱでの教材は大修館の *Genius English Course 2* を基本情報の input に利用している。各課の題材について極力原典を中心に扱いつつ、さらに発展的なあるいは背景に関わる読み物を加えている。新出語彙については、主として学習者用英英辞典(Oxford, Merriam, Longman 等)を使用して、日本語を介さずに語のイメージや意味を理解させ、例文から現実での使用場面等を提示している。本文は短くとも oral introduction で題材の背景を導入し、付属の CD も活用して口頭での英問英答で概要を確認させている。確認後は、キーワードから自分なりに本文を再現させることで内容の output に努めさせている。この output は授業後半 5~8 分を使用し、英語 80 語程度でまとめる活動である。各作品は指導者で添削するが、良い作品および学びの多い作品(共通する誤用の多いもの)を次時で共有することで output への動機づけを促すことに寄与している。概要の確認後は、本文を提示して詳細な内容を把握させる。内容が理解・整理できたところで、重要な文法事項を確認し数問の演習を行う。次に理解した内容の状況を映像として思い浮かべながら chorus reading や read and look up、音声に続いて shadowing をするという流れで進めている。次時には

前時の内容を要約した文章に空欄を作り、本文とは異なる文章表記でも内容から正しい品詞等で英文を完成させる活動を行なうという流れで進めている。また各単元終了後に、予習ではなく復習の意識喚起を込めて語彙・表現・基本例文の小テスト(15点程度)を行っている。語の訳語(日本語)だけを記憶しても、状況や場面が変われば文章での表現も変わることから、定義や使用されるに適した場面で語が選択できるように問題文作成に工夫は必要であり、難しい。しかし、正答を示すと生徒はこの学習の意図を理解してくれる。

授業は上記学習活動に関わるものすべてを一つのプリント冊子にまとめ、視点を一点に集中できるようにしている。海外生活経験者や塾での学習で先へ先へと学習を進めている生徒もいれば、授業で学習することが全て新出である生徒もいる、と習熟度は様々であるが各々が授業で活躍できる場(口頭でも筆記でも)ができるように極力多くの質問を投げかけたり書く題目を与えたりと、誰もが萎縮せずに「(間違えても)発することが大事な歩み」ということを理解してもらうことに努めている。日頃は受験を意識していない学習と思えても、実はどんな学習でも入試には必ず関わっていることが実感できるような演習問題を今後は取り入れていく予定である。

単位としてリスニングの授業は設定されていないが、担当する3単位のうち1単位で LL 教室を使用した授業を行っている。この授業では、input は主に映画を使用して、内容確認の output として口頭や筆記での言語活動を行っている。口頭での内容確認は英問を内容の事前提示にあまり陥らないように努めて数問解答させたり、筆記での output は視聴した内容について自分なりに指定された時間と語数でまとめたり、ある題目に従って意見や想いをまとめたり等の活動を行っている。題材として1、2学期で使用した映画は次の3作品。

- 1) *The Dark Knight* (2008, 米国)
- 2) *The Truman Show* (1998, 米国)
- 3) *Powder* (1995, 米国)

いずれも各回の授業における視聴時間は10分~20分。どの場面をどれだけ視聴させるかの時間配分は難しいが、教材として使用する映画の選択が生徒の興味・関心に合致した時の反応は興味深く、これはいかに内容を捉え、他者に映画について過不足なく説明できているか、視聴後にまとめさせた生徒の作品によく現れている。その作品例をいかに示す。

● The TV program “Truman Show” shows the life

of a man named Truman who has been imprisoned to the islands that is like our world, in which there are houses, building, mountains, and a sea since he was born. And the director ordered the actor who had made believe that he was Truman's father to show his false son that he drowned in the sea in front of Truman to plant him the fear of water and prevent him from escaping from the set over the sea.

● Those who designed "the Truman Show" get money by appealing their products. This program has no commercial interruptions and they place productions in the set and casts use it. Some products are introduced in it and some are filmed. All products are sold and viewers can get in "Truman Catalog." The set was constructed on an island and isolated. It was covered with dome and this program was on the air in many countries.

● "The Truman show" has been watched all over the world, and shows all about Truman's life twenty-four hours a day, seven days a week. Truman, who is the only one who doesn't know about the TV show, was born in the huge studio "Sea haven Island" and has grown up there. He has never gone out the island because of efforts of casts and his fear of the water, which is programmed within the story. Inside the studio, he lives blessed days until he notices something strange happen around him.

3.6.3 今後の課題

学年が上がるにつれて塾に通ったり、通信教育などで進度を先に進めたりする生徒が増える中で、外国語学習が「語の置き換え」作業に終始される傾向がある。空欄補充・和訳英訳・整序などができれば良しと考えられることが増えていることが否めない中で、「実践力」とは何かを毎時間感じられるように学習指導要領の「英語の授業は英語で」という方針に基づき、どれだけ平易であろうが数多く英問英答を取り入れて、場に応じた速いレスポンスが英語でできるよう、さらには場に応じた「語・表現」を選択使用でき、聞き手に発信者の意図が最大限伝わるような表現力が着くように授業の組み立てや教材の開発および授業の実践を行っていきたい。

3.7 高校2年生(63期)英語II:TTでの取り組み

担当：須田智之

3.7.1 はじめに

高校2年生の4単位中の1単位で、ALTとのチーム・ティーチング(以下TT)により、スピーチ、プレゼンテーション、ディスカッションやディベートを行うというのが筆者の担当である。生徒達自身が題材について深く掘り下げながらも英語での表現がし易いように、学校行事や身近な話題を取り上げて発表活動をしてもらうよう心がけている。41人というクラスサイズのため、一人ひとりに十分な発話量を確保するのが難しいが、英語のネイティブスピーカーであるALTとの自然なやり取りや、各クラスに数名ずついる帰国生、英語での自己表現が得意な生徒達の発表に授業が盛り上がることもある。授業1時間の構成としては、まずテーマや活動内容の提示や説明を行い、ペア・グループによる活動を経て、最後にクラス全体の前で発表するという形を基本的にとっている。

3.7.2 1学期の授業

筆者は63期の授業を受け持つのが初めてだったので、1学期最初には英語での自己紹介活動と他己紹介スピーチを実施し、生徒には自己紹介をまとめたカードを提出してもらった。その後、GWの出来事についてのレポート活動、英語絵本のスキット作成、関西地域研究の直後には京都市長の英語挨拶を参考に関西の魅力をアピールする挨拶文の作成、英詩の作成などを行い、学期の最後には「将来の夢」についての課題スピーチを実施し評価の対象とした。

3.7.3 2学期の授業

1学期末に約2年間に渡ってTTの授業を担当して下さったNew Zealand出身のALTが帰国することとなったが、2学期になっても後任のALTがなかなか決まらず、週替わりで複数のネイティブ講師に来校して頂くという事態に陥ってしまい授業の準備にやや苦慮した。前半は夏休みの思い出に関するレポート活動から始め、英語俳句の作成、オリンピック東京招致の際の滝川クリステルさんのスピーチ原稿を英訳して発表する活動などを実施した。

英語俳句は週刊ST主催の第4回全国高校英語俳句大賞への応募作品を生徒一人ひとりに作成してもらったところ、本校生徒3名の作品が第一次選考通過の100作品中に選ばれ紙上に掲載された。残念ながら入賞作品として選ばれた作品はなかったものの、学校団体賞

を頂くことができた。今回のお題は雷 (thunder または lightning) で本校生徒の作品は以下の通りである。

big sound after sharp flash
dazzling, glaring, luminous
mystery of nature

lightning falls
this incredible power
connected sky and land

rumbling and grumbling
they strike down from the heavens —
a disfigured fork

また、例年この時期に、英語での言葉遊び・言葉探しを体験してもらうため、日本「アジア英語」学会主催の ESSC(Extremely Short Story Competition) という、50 語ぴったりで英詩などの作品を作るという学習者向けのコンテスト作品を応募してきたが、今年度は形式が変わってしまった為、残念ながら応募を見送ることにした。今後は週刊 ST 紙上にコンテストが引き継がれるとのことなので、可能であれば今後も参加を呼びかけていきたい。

2 学期後半は『英語ディベート理論と実践』（玉川大学出版部）などを参考にしながら「縁日班は競りを廃止すべきである。是か、非か。」、「男性は人前で泣いてはならない。是か非か。」などの論題についてのディベートを学期末に実施した。しかしながらディベート指導に関しては、テーマ設定が難しく、今一歩踏み込んだ指導が出来なかったのが反省点である。学期末考査後の特別時間割期間中に、希望者対象に映画 *The Great Debaters* の上映会を実施するとともに、3 学期の授業の準備として映画『いまを生きる』を鑑賞する機会を設けた。

3.7.4 3 学期の授業

3 学期は入試などもあり授業の回数が極端に少ない為、授業計画にも工夫が必要である。具体的には昨年度 2 学期より新しく本校に来ていただいている ALT が Hip Hop や Rap に造形が深いということなので、そういったジャンルの Creative Writing に取り組ませるとともに Dead Poets Society in Tsukukoma と題して、自作や自分の好きな詩についてのプレゼンテーションを学期末に実施予定である。

3.8 高校 3 年生 (62 期) リーディング

担当：山田忠弘

3.8.1 はじめに

高校 3 年生の英語は、英語 R (Reading) 3 時間、英語 W (Writing) 2 時間の両方が選択授業となる。英語 R では主に Reading の問題演習を行ったが、どちらにもない Listening の練習はこの時間内で行った。留意した点としては、大学入試問題演習に終始しないよう、それより少し上のレベルの教材を選んだこと、様々なタイプの演習を 1 時間の中に少しずつ入れるように心がけたことである。

3.8.2 教材と授業での取り組み

教材は自作プリントを用いたが、その構成と出典について述べていきたい。

週 3 回の授業を 2 回と 1 回に分け、2 回の方は「和訳・速読」と位置づけ、下線部和訳問題（大学入試問題または問題集より必要に応じて改題）と、速読問題（英検 1 級問題集）の演習を行った。残りの 1 回は、「要約・リスニング」とし、日本語要約問題（英検 1 級問題集など）とディクテーション・リスニング（TOEFL ITP テスト問題集）を扱った。添付の解答用紙に解答させ、自己採点をさせて提出させることで、毎回の課題として成績に算入した。最大多数の生徒に適切な負荷をかけられるよう、レベルは大学入試問題より少しだけ上に設定するよう、毎回のプリント作りでは注意した。

その他には、授業では出来ない長文読解の練習を補う意味で毎週初めに、東京大学出版会の“The Universe of English”から 1 セクション（英文 4 ページ程度）を配布し、次週に和訳問題の小テストを行った。同テストは、前述の演習問題中の単語テストも含めた。

また自習用として、TOEFL 問題集から文法・語法問題を毎週配布し、同形式の問題は期末試験などで出題した。

3.8.3 今後の課題

この学年に限らないことだが、1 冊のテキストに全て依存したり、生徒に予習を求めたりすることが難しい本校の実情を考えると、どのような内容にどれだけの時間を配分するかは全て教員のさじ加減次第となり、授業の成否の分かれ目ともなる。教材の選択などにおいては、常に良いものを求めるようアンテナを張り、より適切な内容、分量となるよう常に改良する心構え

を持ち続けたい。

3.9 高校3年生(62期)ライティング

担当：平原麻子・秋元佐恵

3.9.1 はじめに

2 単位の自由選択科目である。英文での発信力向上を目指し、英文法を確認しながらの和文英訳指導とパラグラフライティングの指導を、週にそれぞれ1時間ずつ行っている。高校3年生の授業は2学期までで、3学期は自宅学習となるため、授業内容も2学期で完結するシラバスとなっている。

3.9.2 英文法の確認と和文英訳（平原）

3.9.2.1 授業の概要

英文法を、ルールの積み重ねとしてとらえるのではなく、なぜそのような表現になるのか、の根本がとらえられるような授業を目指した。たとえば、個々の前置詞が持つイメージや、冠詞 the の持つ機能は①ただひとつに決まる機能と②まとめる機能だ、といったことの確認である。また、和文英訳については、まず和文和訳を行い、ややもすれば曖昧になりがちな日本語表現を構築し直し、それから英文に移し替えていく作業を心がけた。また、同じ日本語から様々な英文の産出が可能であることを強調し、生徒の自由な発想をすくい上げるよう努めた。

3.9.2.2 学期毎の授業展開

(1) 1 学期

重点的に取り上げた項目は以下の通りである。
時制／仮定法／助動詞／因果関係／受動態／S は～だ
いずれも日本語の発想とかなり違う側面を持っているので、丁寧に指導しなければならない要素だ。

この他 creative writing として、Beatrix Potter の書いた、悪い兎に関する短い物語を、挿絵を見ながら聞き、その後日談を創作する、という試みを行った。文法的には「時制のコントロール」をテーマにしている。ここでは生徒の投票によって、全作品の中から優秀賞を選んだ。

(2) 2 学期

2 学期には以下の項目を取り上げた。
前置詞／冠詞／可算・不可算／英語にしにくい日本語（「よろしくお願いします」など）／比較／譲歩／時間・数字／関係詞

特に最初の4項目は、参考書などでも分かり易い記述があまりなく、生徒は興味を持って取り組んでいた。

3.9.3 パラグラフライティングの指導（秋元）

3.9.3.1 授業の概要

パラグラフの概念を学んだうえで、英文の効果的な書き方のトレーニングをする授業である。「段落」とは異なり、one main idea をはっきりと示すこと、それを transition signals など適度に用いて、説得力あるように（できれば美しく）まとめることが目標となる。指導する側としては、

- ①なるべく毎回書かせて全員分添削
 - ②書く前に背景知識と語彙をインプット
 - ③生徒の優秀作品をフィードバック
- の3点を目標とした。

3.9.3.2 学期毎の授業展開

(1) 1 学期

初回の授業でパラグラフの定義づけをし、模範的なエッセイの構成を分析した。その後、「自分の好きな人」「ジョーク」「日本文化を代表する人物」「今まで読んだ印象に残る本・映画」などのタイトルで、授業内に書かせた。評価の観点は「語数」「構成」「内容」「文法的正しさ」「語彙や文型の豊かさ」の5つ。全体へのフィードバックの際には、優秀作品をいくつか提示し、transition signals や punctuation の効果的な使い方を皆で学んだ。

(2) 2 学期

パラグラフの展開方法が身についたところで、「説明文」「意見文」「資料を読んで書く」「グラフを見て分析する」など、いくつかの種類の文章を書かせてみた。たとえばグラフ分析のレッスンでは、グラフ説明用語(a sharp rise, a gradual decrease など)のインプットをしたあと、ここ10年の日本の人口の推移のグラフを分析させた。以下は模範例として全体に紹介したものである。

This chart shows that the total population has gradually increased while the number of the people younger than 65 years old is slightly decreasing. If this trend continues, the total population would drop and percentage of the old people would rise. The young people would have to take care of the old people though they are less in the number than the past. Moreover, the decreasing number of the total population would cause a less consumption in the domestic market and could lead the company in Japan to go bankrupt.

これは学んだ語彙（下線部）をうまく使いながら、

transition signal、this trend などの summary word (波線部) も効果的に用いている好例である。

このほか、昨年度の担当者(平原)の紹介で、「ペーパーディベート」(10分で意見を書いて後ろの席に回し、もらった人はその反対意見を書き、その後ろの人がジャッジ)を初めて試みたところ、生徒に好評だったこともつけ加えておく。

4. 総合学習での取り組み

4.1 概要

本校では総合学習の一環として、中学3年生にテーマ学習、高校2年生に「ゼミナール」という時間を設け、土曜日を活用しながら、普段の授業では扱えない内容を取り上げてそれらを専門的に深めていく学習を行っている。各教科がそれぞれに対して担当者とテーマを出し、生徒は自分がやってみたいものを選択して参加するシステムで、ひとつの講座で学ぶ生徒の人数は概ね10～20名程度である。

英語科は、第3期目に入った本校SSHの重点目標のひとつ「グローバルサイエンティストの育成を目指す」を意識して、日本学術振興会(JSPS)が提供する『サイエンス・ダイアログ』というプログラムを利用しながら、「国際社会において、受容・発信する能力の育成」に努めている。

このプログラムの詳細についてはJSPSのHP(<http://www.jsps.go.jp/j-sdialogue/>)を参照していただきたい。

4.2 中学3年生(65期)テーマ学習(年6回・土曜)

担当：平原麻子

今年度の講座名は「Science Dialogue Jr.」である。

本講座の目標は(1)海外からの若手研究者に自分の国や経歴・研究内容について英語で講演していただき、彼らと積極的にコミュニケーションを図る、(2)同時にプレゼン技術についても学ぶ、(3)(1)(2)を踏まえて自分が研究したことを英語で発表する、の3つである。生徒にとって毎回の講演テーマは内容が深く専門的で、英語での理解が易しいとはいえないが、研究者の方々の工夫(簡単な実験を行う、映像を見せる等)と上手なプレゼンで、大体的内容は理解できている。

また、若手研究者の発表以外にも、「先輩に学ぶ」として海外研修派遣経験のある本校高校3年生に参加してもらったり、English Roomプログラム(別述)で講師をお願いしている東大大学院留学生にプレゼンの

コーチングをしていただき、大きな成果をあげている
今年度の講義内容は以下の通りである。

表1. Science Dialogue Jr. 年間計画

Date	Speaker	Topic
①June 8	—	全体オリエンテーション *各教科からの説明を聞き、自分の参加したい講座を選ぶ
②June 22	本校高校3年生 (SSH 台湾研修 派遣生徒)	数学 *昨年度の台中高級第一中学との研究交流で発表したもの
③Sept. 14	Dr. Amy Yu-Ching Hsiao (USA)	ナノ・マイクロ科学 (人体をモデリングする)
④Sept. 28	Dr. Karl Wu (Taiwan)	政治学(北米大陸へのアジア系移民)
⑤Oct. 19	Dr. Bostjan Bertalanic (Slovenia)	政治学(第一次大戦中の日本におけるユーゴスラビア人捕虜)
⑥Jan. 18	Dr. Felix G. Marx (Austria)	地球惑星科学(ヒゲクジラ類の進化における多様化と懸隔化)
⑦Feb. 8	受講生徒自身 のプレゼン	各自の興味に応じた内容

4.3 高校2年(63期)ゼミナール(年7回・土曜)

担当：多尾奈央子

高2ゼミナールでは、今年度も日本学術振興会によるプログラム「サイエンス・ダイアログ」に参加している。この学年は中学3年テーマ研究に続いての参加となる。このプログラムでは年間7回のうち4回で講演を実施するが、講師に日本の大学機関で研究中の若手外国人研究者を迎え、以下の目的で講義を受ける。

- 1) 様々な国の様々な分野(文理問わず)の若手研究者と接し、視野を広げる。
- 2) 英語(non-native)を聞き、述べたい(るべき)こと表現したい(すべき)ことを英語で発信する力および発信しようとする意識を醸成する。

講師の多くは英語のノンネイティブスピーカーであり、講義は2校時を使用してスライドショー(PPT)を用いて行われる。各回の講演では、共通して自分の国や経歴、研究内容について話してもらう。一方的な講義の受講ではなく、interactiveな時間となるように質疑応答の時間をできるだけ多くとることに努め、講

義後の質疑応答を通して特に②が達成されることをねらいとしている。

講師と講演内容は以下の通りである。

表 2. Science Dialog 年間計画

Date	Speaker	Topic
①June 1	—	全体オリエンテーション *各教科からの説明を聞き、自分の参加したい講座を選ぶ
②June 15	Dr. Alexander J. O'Connor (USA)	心理学 (創造性についての素朴理論と創造力)
③June. 29	Dr. Daniel D. Friedrich (Germany)	物理学 (重力波の検出)
④Oct.5	Dr. Sin-You Lu (China)	理論計算物理学 (電子回路における量子力学)
⑤Nov. 16	Dr. Seino K. Jongkees (New Zealand)	生物分子科学 (低酸素誘導因子と特殊ペプチド)
⑥Jan. 11	受講生徒自身のプレゼン	各自が開発した英語学習教材
⑦Jan. 25	受講生徒自身のプレゼン	各自が開発した英語学習教材

回によっては 3~4 校時が配当されているが、そこでは本ゼミ担当者で設定した『映画を使用した言語学習について考察および教材作成』テーマに基づき生徒自身で『外国語学習・異文化学習に適した映画』を選び、実際に使用できる教材案なるものを作成・発表し、相互に評価する活動を行う。ここでは

単に英語のスキルを高めるだけではなく、媒体を通じて言語や文化についての理解を深め、他者に理解してもらうための表現や伝え方の方法等を教材作成を通じ学んでもらうことをねらいとしている。最終的には高 3 の「テーマ研究」の卒業認定作品となる受講者 (生徒) 視点の英語学習教材を作成する予定である。

5. 国際交流を支援する取り組み

5.1 はじめに

ここ数年で本校生徒が海外の人々と交流する機会が

増えてきた。交流の目的は文化交流の場合もあるが、科学的な内容の研究交流が主流であるところが SSH 校である本校の特徴といえる。英語科では、日常的な授業の中でプレゼンテーション能力を鍛える指導を行っているが、生徒が研究交流の場で十分な成果をあげるためには、さらに授業外での支援が必要となってくる。

以下に、国際交流支援活動の一部について述べる。

5.2 研究交流における英語科の支援活動

5.2.1 国際交流デー (国立台中第一高級中学による本校来訪)

5 月 29 日に国立台中第一高級中学 (以下台中一中とする) の生徒 52 名と先生方 3 名を始め、総勢 57 名の方が来校された。筑駒でこれほどの大規模な訪問団と丸一日交流することは初めてのことであった。

台中一中と本校の交流は 2009 年に遡る。この年から筑駒からは毎年 12 月に 16 名の生徒を派遣している。台中一中からは以前にも訪問団が来る予定だったが、新型インフルエンザや震災の影響で中止になり、やっと本年に実現することとなった。

当日は高 1、高 2 の生徒がバディ (案内役) としてつき、授業や昼食を共にし、午後は研究発表と筑駒の学校紹介を、オープンスペースを使って英語で行った。研究発表は大作が多く、多くの生徒により刺激になったと思われる。

自治会役員および有志で運営に携わってくれた生徒は実によく準備にあたり、手前味噌であるが本校生徒が行事に関する企画力と実行力の高さを持っていることが示された。

当日の日程

9:10	台中一中訪問団到着
9:20~10:00	歓迎セレモニー
10:15~11:05	授業①
11:20~12:10	授業②
12:10~13:10	昼食
13:10~15:30	研究発表
15:30~17:10	部活動参加
17:30	見送り

5.2.2 プレゼンテーション・スキル・ワークショップ

昨年度に引き続き、サイエンス・コミュニケーション・スペシャリストとして活躍中の Mr. & Mrs. Vierheller 氏を招き、希望者を対象とした英語での効

果的なプレゼンテーション・スキルについて学ぶワークショップを第1学期期末考査後に開催した。

“Learn to Present”と題された本講座には中3から高3まで約60名の生徒が参加し、異学年集団を形成してグループごとの発表活動に取り組んだ。指導の中心は聴衆を引き付けるためのさまざまなスキルであった。具体的にはスピーチをする際の声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについて、実際にグループで発表をしながら指導して頂いた。

3時間ほどのまとまった時間で達成感を得ることができ、普段の授業ではなかなかできない取り組みである。なお、3学期には昨年同様、中1・2を対象とした「ビギナーズ用ワークショップ」を開催する予定である。

5.2.3 東芝地球未来会議へのサポート

担当：高橋深美

東芝地球未来会議とは、東芝国際交流財団の支援で米国、タイ、ポーランド、日本の4カ国から、それぞれ2校4名、合計16名の生徒(と引率教員8名)が集い、環境問題や持続可能な社会の発展について討議しあうものである。この会議は5年前から始まったが、本校が参加したのは一昨年からである。昨年、一昨年はタイで行われていたが、本年は東京のオリンピックセンターで8月1日から8日まで、7泊8日の日程で開催された。

期間中は講義の受講、討論、プレゼンテーションおよび博物館等の見学が行われ、本年は半日が本校のケルネル田んぼ、および周辺の駒場野公園での観察・セミナーに充てられた。

米国以外の国から来た生徒たちは、英語により討論をすることで、初めは臆していたものが、徐々に打ち解け、英語でのコミュニケーションに慣れてくるようになる。と同時に、深いところで、まだまだ十分な意思疎通や自分の主張を述べることができない歯がゆさ・限界も知ることになる。しかし、その不十分であることの自覚が、更なる勉強の動機づけとなる点で、このプログラムは有益といえることができる。

5.2.4 台湾国立台中第一高級中学との研究交流へのサポート

担当：多尾奈央子

5.2.4.1 プレゼン指導

各学年における指導の蓄積が実践力として発揮されるよい機会として台湾の台中一中との研究交流がある。派遣生徒はこの研究発表や交流時に知識として持って

いる能力を実践力として発揮することの難しさを直に感じるが、その後の学習へ動機が高まるなど意義深い機会となっている。今年度は、昨年までのプレゼンテーションの専門家による指導を受ける機会に加え、新たに設置した『English Room』プロジェクトを活用して事前準備を進めることができた。

5.2.4.2 事前指導

今年度も Gary Vierheller, Sachiyo Vierheller 両氏の協力を得て、12月の期末考査後に台湾派遣生徒を対象に、それぞれが自身のプレゼンを披露し、両氏から直接指導を受ける形で1回目の事前指導を行った。そのfeedbackを受けて、内容を推敲し数日後に再度、English Roomの講師を4名迎えて最終リハーサルを行った。派遣前にたった2回とは言え、生徒は聴衆を引き付けるためのさまざまなスキル、スピーチをする際の声の強弱、イントネーション、アイコンタクト、身振りなどについて複数の講師から実際に発表をしながら指導を受けることができ、本番では自信を持って発表に臨めたと考える。

実際の発表後、生徒に感想を聞いてみると、やはり自分で理解していることを聞き手に分かってもらえるように発表内容を厳選し、言葉や表現を選び、発することの難しさはあるもののもっとも重要なのは、「伝えようとする」気持ちであると実感できたようである。外国語学習・外国語習得にあってはこの「間違いを恐れずにまずは伝える」姿勢が実感できることが大切でこのような機会がもっとももっと増えることを期待する。

5.2.5 韓国・釜山国際高校との交流へのサポート

担当：高橋深美

5.2.5.1 はじめに

本校はSSH校として上述のように台中一中との研究文化交流を続けているが、これは主に理数科に興味のある生徒中心のプログラムである。昨年より、筑波大学から「附属学校のグローバル化に資する事業」として「アジア諸地域の教員・生徒と本校教員・生徒との研究交流の促進」として予算をいただき、その一部を文系に興味のある生徒のためのプログラム開発に充てている。2013年1月に釜山国際高校より本校に初の訪問団が訪れ、また2013年3月に本校から先方を訪問し、相互交流が実現することとなった。

5.2.5.2 釜山国際高校の本校訪問

2014年1月23日に先方より生徒は、8名、引率教員

2名が来訪する予定である。

プログラムは昨年に倣い以下のように行う予定である：

午前 歓迎～学校紹介・自己紹介
日本民藝館訪問、東大駒場キャンパスにて
昼食
昼休みに集会にて、全校生徒に紹介
午後 5、6時間目 授業参観・参加
放課後、部活動見学その他

5.2.5.3 本校生徒の釜山国際高校訪問

2014年3月25日～29日に、本校生徒10名、引率教員3名で訪問する予定である。

期間中は釜山国際高校への訪問を始め、韓国科学アカデミーへの訪問、また釜山・慶州での見学・フィールドワークを実施することとしている。

5.2.5.4 おわりに

昨年、本年と相互訪問が定着しつつあるが、まだ手探りで行っている部分も多い。今後、活動を積み重ねていくことにより、双方の学校・生徒により望ましい還元の道筋を探っていくこととなろう。

5.2.6 イングリッシュ・ルーム 担当：八宮孝夫

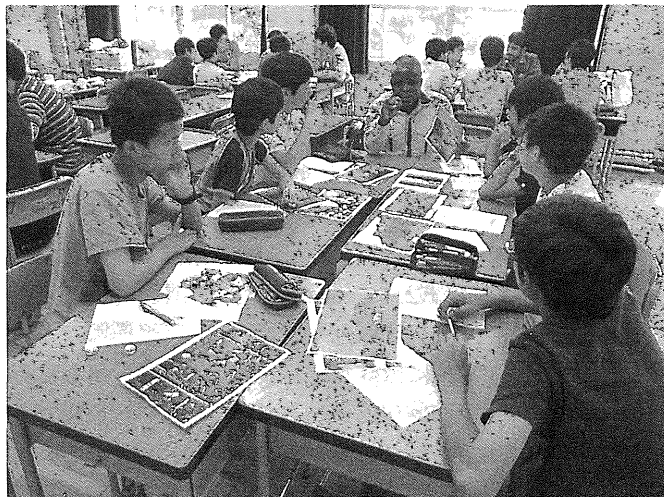
今年度から、筑波大学より「放課後などに利用して生きた英語のコミュニケーションを生徒にさせる機会を増やす」という目的で財政的支援を得て、「イングリッシュ・ルーム」というプロジェクトが始まった。

本校では、近隣に東京大学の留学生ロッジがあり、そこに住んでいる大学院留学生に協力を依頼して、このプロジェクトを行っている。英語科スタッフ自ら面接を行い、7名の留学生を採用したのである。出身もパキスタン、インド、ルクセンブルク、フランス、マラウィ、ナイジェリア、米国と全世界にわたっており、専門も土木、IT、薬学、統計学、環境問題、原子力、コミュニケーション論、と様々である。

通常は毎週火曜日3：30～4：30、希望者を対象に、small talkやゲームをしている。また、テーマ学習の「サイエンス・ダイアログ Jr」では発表活動の指導もしてもらったり、台中一中や釜山国際高校との交流での発表の際も、事前に原稿のチェックやプレゼン練習等で指導をいただいている。

放課後は、生徒たちも意外と部活動などで忙しく、また活用する生徒も限られているので、それをいかに多くの生徒に還元し、魅力的なプログラムにしてい

かを考えていきたい。



イングリッシュ・ルームの様子

6. おわりに

以上概観したように、本校での国際交流の活発化とともに英語科が担う部分が拡大してきた。生徒のプレゼン能力の向上に向けてさらに工夫をこらしていかなければならないと同時に、「国際交流＝英語科」というステレオタイプから脱却し、他教科の先生方をいかに巻き込んでいくか、も今後の大きな課題である。

【参考文献】

深澤俊昭 (2006) 『英語ヒアリング集中レッスン : 基礎編』 アルク

松本茂他 (2009) 『英語ディベート 理論と実践』 玉川大学出版部。

Murphy, Raymond (2012) 『マーフィーのケンブリッジ英文法 (初級編) 新訂版』 Cambridge University Press

中嶋洋一 (1997) 『英語のディベート授業 30 の技』 明治図書

斎藤雅久 (2012) 『教養の場としての英文読解』 游学社

玉井健 (2005) 『決定版 英語シャドーイング入門編』、コスモピア株式会社

手島良 (2004) 『英語の発音・ルールブック』 (NHK 出版)

東京大学教養学部英語教室編 (1993) “The Universe of English” 東京大学出版会

鳥飼久美子 (2003) 『はじめてのシャドーイング』 学研

The Truman Show (1998, 米国)

Powder (1995, 米国)

高校 3 年

『英検 1 級 読解・記述問題ターゲット』 (1997) 旺文社

梶木隆一 『英文解釈 1000 題』 学生社

喜田慶文 (2006) 『TOEFL テスト リスニング問題 350』 旺文社

木村哲也 (2013) 『全問正解する TOEFL ITP TEST 文法問題 580 問』 語研

宮野智靖、ジョセフ・T・ルリアス、木村ゆみ (2011) 『TOEFL ITP TEST リスニング完全攻略』 語研

龍口直太郎 (1977) 『新改訂版 英文解釈読本 応用編』 開隆堂

田中真紀子 (2006) 『TOEFL テスト リーディング問題 270』 旺文社

富田一彦 (2003) 『富田の基礎から学ぶビジュアル英文読解 構文把握編』 代々木ライブラリー

<副教材・テキスト類>

中学 1 年

Let's go to the rainforest (Dolphin Readers, Oxford)

中学 2 年

Wonders of the Past (Oxford Read & Discover, Level 4)、

Apollo 13 (Penguin Readers, Level 2)

中学 3 年

Martin Luther King (Penguin Readers, Level 3)

The Black Cat and Other Stories (Penguin Readers Level 3)

Tales of Mystery and Imagination, (Oxford Bookworms, Level 3)

柴原智幸 (2013) 『攻略! 英語リスニング』 8 月号、11 月号 (NHK 出版)

中学共通として

NHK ラジオ 『基礎英語 1』、『基礎英語 2』、『基礎英語 3』 (NHK 出版)

高校 1 年

Beowulf (Blackcat)

Q:Skills for Success (Oxford University Press)

高校 2 年 (いずれも DVD)

The Dark Knight (2008, 米国)

補足資料 1 中 1 授業初回アンケート (八宮 2012 を改定)

中学 1 年 英語アンケート			2013 年 4 月 15 日
中学 1 年	組	番	氏名【漢字】
出身小学校			氏名【ローマ字】

Q1 小学校での英語について教えてください。何年生から、どのくらいの頻度で教わりましたか？

小学 年生～ 週に・月に・年に..... 回程度

Q2 教えてくれた先生は？【複数回答OK】

ア) 担任の先生 イ) 日本人の英語の先生 ウ) 英語を母国語とする人

Q3 テキストは使用しましたか？

ア) 使用した イ) 使用しなかった

●ア) 使用した、と答えた人→使用テキストは？

ア) Hi, friends! 1・2 イ) 英語ノート 1・2 ウ) 学校独自のテキスト

Q4 授業でアルファベットは習いましたか？

ア) 習った イ) 習わなかった

●ア) 習った、と答えた人→どの程度？【複数回答OK】

ア) 文字の読み方 イ) 文字の書き方 ウ) 文字と発音のルール

Q5 どのような形式の授業でしたか？【複数回答OK】

ア) テキストに沿って イ) 先生のプリントを使用 ウ) ゲーム中心

エ) 文字や文を書く オ) 英語の絵本などを読む

カ) 英語の歌を歌う→とくに印象に残っている歌があれば：.....

Q6 どんな単語が出てきましたか？【複数回答OK】

曜日 月名 時刻 天気 数字 (いくつまで？.....まで)

国名 色 スポーツ 食べ物 動物 教科名

方角 ものの形 道順 店員との会話 職業

Q7 小学校以外の場所で、英語を学んだことがありますか？

ア) はい イ) いいえ

●ア) はい、と答えた人→具体的にはどこでどのくらい？

場所：..... 週・月に..... 回程度

Q8 海外で暮らした経験があれば、書いてください。

滞在国名：.....

滞在時期：..... 歳 ～ 歳 まで

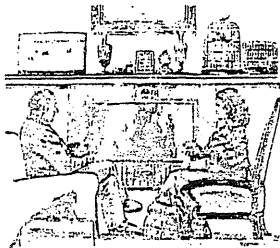
Q9 最後に、あなたの英語の目標 (または英語を使って将来やりたいこと) を教えてください。

補足資料 2

- 7 次のイラストを参考に The Black Cat の前半のあらすじを英語で書きなさい。
最初の部分と最後の部分は示してあります。また、それぞれのイラストにはヒントとなる語句が書いてありますが、必ずしもこれを活かして書く必要はありません。
(②～⑤をまとめればよい) (6)

This man used to be a very kind man. He and his wife kept a lot of animals. His favorite was a black cat called Pluto.

- ① The man and his wife ...
His favorite was ...



- ② The man became ... because of ...
He ...



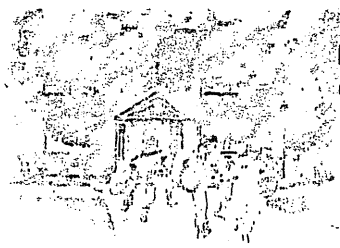
- ③ One night, he caught ...



- ④ Pluto got better. Then, the man did something more terrible.
He ...



- ⑤ The same night, his house ...



- ⑥ The next day, he found ... on the wall. It gave him ... He began to...



The next day, he found a black shape of a large cat. It gave him a great shock. He began to look for another cat like Pluto.

- 10 Murder on the Orient Express に関して、次のことを含めて英語で感想を書きなさい。(5)

Who killed Mr. Rachett? Did Poirot punish them?

What do you think about the ending?

(Do you think Poirot's solution was right? Why do you think so?)

諸君の解答から（採点は、文法ミスを減点するより論理展開で評価しています）

7 話の要約

He was slowly changing because of drinking alcohol. He hit his woman and his animals except Pluto, but finally he started to hurt Pluto, too.

One night, he caught Pluto and held him by the neck. Then he hollowed [cut] out one of Pluto's eyes. Pluto got better. Then, the man did something more terrible. He hung Pluto by the neck from a tree until he was dead. the same night, his house was on fire but he and his wife were lucky to escape. (3A Y)

The man became selfish and often angry because of drinking that changed him. He hit his wife and his pet animals except Pluto.

One night, he caught Pluto by his neck and cut out one of his eyes with his knife. He caught and hung Pluto from a tree until he was dead. The same night, his house was burning and he, his wife and their servants were lucky to escape.

(3B N)

10 英文意見

The people who were riding on the Orient Express all killed Mr. Rachett. I think this ending was good, because Poirot's solution was right – he could punish them if he wanted, but he didn't. There I think M. Poirot was a gentleman who can judge what is right. So I think this ending is good. (3A O)

All of the passengers who were riding on the train killed Mr. Rachett, but Poirot didn't punish them and [nor] tell the truth to the police. I think he was clever enough to understand their mind [feeling]. They couldn't allow [forgive] Mr. Rachett and there was no way but killed him for them.

So I think it is a very good ending, (in) which we can see Poirot's wisdom and kindness. (3B F)

All of the passengers of Orient Express except Poirot killed Mr. Rachett. Poirot didn't punish them. But I think Poirot should have told the truth to the police. Mr. Rachett was certainly a bad man, but murder shouldn't be allowed in any situation.

(3C H)

Mr. Rachett was killed by almost all people on the Orient express. Poirot decided not to tell truth to the police. If I was [were] Poirot, I would tell the truth to the police. What Mr. Rachett did is very bad, but it can't become a reason why someone kills him. I think they could [should] find a different way. (3C Y)